



伝統とは、守るだけではなく新しい挑戦の積み重ね

株式会社 夢おりの郷
代表取締役 南 祐和

終戦直後、奄美大島北部（旧笠利町）に私は生まれました。両親は大島紬の男物を製造し生計をたてていました。ある時、畑仕事中の祖父がハブに咬まれ、父は介護の為に病院のある名瀬地区（現奄美市名瀬）へ間借りすることとなり、その時に大島紬の女物柄を学び父は本格的に大島紬製造業として株式会社を設立しました。

私は愛知工業大学電子工学科を卒業後、東京で電気関係の職に就いていましたが、29歳の時に島に戻り、大島紬製造業に携わることとなり、現在会社設立48期を迎えることとなりました。今思えば、あのハブ事件が大島紬製造への道の始まりだったともいえます。

大島紬の工程は多種に亘るので今でも分業制になっています。私は父からの教えに従い全ての工程を経験し、製品の差別化を図るために柄（意匠）と色（染色）は必ず自分で行うことにしています。図案・染色・加工・織りに至るまで社内ですべて管理し製造していることで、より良き製品への改良ができ、新しいアイデアも生まれます。

また、大島紬製造業特有の出来高制賃金形態ではなく、織りにおいてもパート雇用することにより試作への挑戦、1反1反色柄の異なる製造も可能です。

最近は大島紬にしか存在しない品種の養蚕をはじめました。奄美産の島桑を与え、奄美の空と風と光の中で育て作り出された繭糸は、すべて「奄美」にこだわった貴重な原料絹糸となります。この「奄美糸」を使用し個性ある大島紬や奄美帯の製作へも挑戦しています。

それぞれの人生にドラマがあるように、全ての製品に制作工程のドラマがあります。着物を身に纏った時に、こめられた想いや夢、そして奄美の物語が感じられるモノづくりをしていきたいと思えます。

工業技術センターとの関わりは、古典柄復元のためにセンターへ古布の分析を依頼し、その結果を基に現代風アレンジを加え製品化しました。

また、養蚕を始めるにあたり技術指導先の紹介、指導を受けました。現在では、センターから提案のあった奄美群島の伝統文様のひとつである、針突（はづき）の文様を利用した商品化に取り組んでいます。



開発商品例



社屋と店舗

